

第8回: 国際収支制約下の経済成長 —サールウォール法則—

担当者: 佐々木 啓明*

*京都大学経済学研究科. E-mail: sasaki@econ.kyoto-u.ac.jp

—開放経済における経済成長—

これまでは、閉鎖経済の経済成長を考えてきた。ここでは、開放経済の経済成長を考える。

ポストケインズ派には、Thirlwall (1979)が考えた「サールウォール法則」と呼ばれるものがある。

その背後には

「究極的には貿易収支の均衡が経済成長の制約となる」

という想定がある。

—貿易収支の動学的均衡—

ある時点で輸出と輸入が等しいとしよう(貿易収支の静学的均衡).
この状態が長期的に持続するためには,

$$\text{輸出の変化率} = \text{輸入の変化率}$$

が成立する必要がある.

記号で書けば次のようになる.

$$p + x = p_w + e + m. \quad (1)$$

p : 自国財価格の変化率, p_w : 外国財価格の変化率, e : 為替レートの変化率, x : 輸出の変化率, m : 輸入の変化率.

—輸出関数と輸入関数—

次のような成長率表示の輸出関数と輸入関数を考える。

$$x = \eta_x(p_w - p + e) + \varepsilon z, \quad \eta_x > 0, \varepsilon > 0, \quad (2)$$

$$m = \eta_m(p - p_w - e) + \pi y, \quad \eta_m > 0, \pi > 0. \quad (3)$$

η_x : 輸出の価格弾力性, η_m : 輸入の価格弾力性, ε : 輸出の所得弾力性, π : 輸入の所得弾力性, y : 自国所得の成長率, z : 外国所得の成長率.

(2)式と(3)式を(1)式に代入する.

$$y = \frac{(\eta_x + \eta_m - 1)(p_w - p + e) + \varepsilon z}{\pi}. \quad (4)$$

—サールウォール法則—

長期的に交易条件が一定となるならば, (4)式はもっと簡単になる.

$$y = \frac{\varepsilon}{\pi} z. \quad (5)$$

■ サールウォール法則の第1解釈(小国開放経済)

自国が小国で z を世界の成長率と考えるならば, 各国の成長率の違いは, ε および π の違いに反映される.

$$y_i = \frac{\varepsilon_i}{\pi_i} z. \quad (6)$$

■ サールウォール法則の第2解釈(南北貿易)

世界は先進国(北: North)と途上国(南: South)に二分されるとする。このとき、(5)式を次のように書き改めることができる。

$$\frac{y_S}{y_N} = \frac{\varepsilon_N}{\varepsilon_S}. \quad (7)$$

y_S は南の成長率, y_N は北の成長率, ε_S は南の輸入の所得弾力性, ε_N は北の輸入の所得弾力性.

—弾力性の具体例—

Table 1: 1979年から1995年の東アジアと中南米における弾力性
(出所: Perraton, 2003)

東アジア	ε	π	中南米	ε	π
インド	1.92	0.88	アルゼンチン	1.31	3.01
韓国	3.11	0.70	ブラジル	1.92	1.77
マレーシア	3.24	1.66	ウルグアイ	1.49	2.78
スリランカ	2.63	1.44	ペルー	0.69	0.94
タイ	3.83	1.45	ボリビア	0.23	0.50